

令和4年7月15日から7月16日の大雨に伴う技術対策について（追報）

○事後対策：収穫が期待できない水稻

- (1) 冠水により収穫が期待できない水稻については、次年度の水稲栽培に影響が出ないように、刈取後、搬出し堆肥として利用する。次年度作の前には、完熟堆肥を施用し、土壌の肥沃度を維持する。
- (2) 稲の持ち出しが困難な場合は、できるだけ早期にほ場を乾燥させた後、速やかにロータリー等で稲体を土壌にすき込む。稲が立毛しており草丈が高くロータリー等ですき込むことができない場合は事前に稲をチョッパー等で細断する。また、全倒伏で細断が不可能な場合はディスクプラウですき込む。
- (3) その後十分混和させるためロータリー等でさらに1～2回程度耕うんする。混和後は適度に乾燥させ稲残渣の分解を促進し、次年度の水稲栽培への影響（異常還元等）を軽減する。なお、石灰窒素など腐熟促進剤を施用すると次年度に余剰の窒素分を残すことになるので控える。
- (4) 稲をすき込んだ場合は、次年度、すき込んだ稲から窒素等が放出される可能性があるため、水稻を作付けする場合は、すき込み量に応じて基肥窒素量を減肥する。なお、本年度作水稻が生育過剰ですき込み量が多い場合は、次年度の水稲作では基肥を施用しないことを検討する。

○事後対策：収穫が期待できない大豆（未成熟大豆（えだまめ）も含む）

- (1) 冠水により収穫が期待できない大豆については、できるだけ早期にほ場を乾燥させた後、必要に応じてモアやチョッパー等で細断して、ロータリーですき込むこと。なお、分解を促進するため、表層にすき込むよう調整する。
なお、農業共済、経営所得安定対策に加入している場合は、あらかじめ農業共済組合、市町村、農協等に相談する。
- (2) 浸冠水したほ場では、暗きよへの泥水浸入も考えられるため、暗きよの機能を確認し、必要に応じて泥の除去など暗きよの通水性を確保する。
- (3) 生育期間が短くすき込んだ大豆が少ない場合は、窒素等の放出量は限定的なので、次年度作では減肥する必要はない。一方、すき込み前大豆が生育過剰等ですき込み量が多かった場合は次年度作では減肥を検討する。なお、次年度、水稻に転換する場合は、大豆の生育量にかかわらず原則無施肥で栽培する。

○事後対策：収穫が期待できない露地野菜（転作）

- (1) 冠水により収穫が期待できない野菜については、できるだけ早期にほ場を乾燥させた後、必要に応じてモアやチョッパー等で細断して、ロータリーですき込むこと。なお、分解を促進するため、表層にすき込むよう調整する。
- (2) 浸冠水したほ場では、暗きよへの泥水浸入も考えられるため、暗きよの機能を確認し、必要に応じて泥の除去など暗きよの通水性を確保する。
- (3) 野菜をすき込んだほ場で、次作に野菜または大豆を栽培する場合、土壌分析結果に基づく施肥を行う。また、水稻を栽培する場合は、原則無施肥で栽培する。